

校内別室の活用による全校体制での不登校対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 1 学期から緘黙傾向があり、大きなトラブルはなかったものの教室に適応できずに、不登校となった。集団生活になじむことが難しく、別室登校をするようになった。現在は、別室登校をしている他の生徒と少しずつコミュニケーションを取る、検定へチャレンジするなど前向きな活動が増えている。

具体的な取組

○教育相談部での支援の確認

隔週で実施している教育相談部会にて、当該生徒の状況報告、別室登校をしている他の生徒との関係性、配慮事項など様々な確認をしている。

○個別支援の充実

担任による当該生徒への個別の面談や声かけか、保護者への定期的な学校生活の報告を行っている。また、登下校の時間が日によって変わるため、学年の職員だけでなく、管理職も含めた全校体制で登下校時の声かけができるよう状況の周知徹底を行っている。

○別室登校用の教室環境の充実

学習への取組と別室登校の他の生徒とのコミュニケーションの取りやすさを両立できるように環境を整えている。空き教室が少ないため、パーティションを活用し、勉強スペースと談話用のほっこりスペースに分けている。



ほっこりスペース



勉強スペース

○学校生活サポーターの活用

別室登校対応の学校生活サポーターによる登校時の活動の見守り、他の生徒の関わりの中での出来事等の報告などを細やかに行っている。

当該生徒が悩んでいる友達との関わり方などに関しては、当該生徒のことを考えたアドバイスなど教員とは違う立場の大人としての関わりも支援の重要な要素となっている。

成果

毎日の登校により、生活習慣が整い、学習への意欲も増してきたため、担任より検定等にチャレンジすることを提案したところ、毎日地道に学習を進め、合格することができた。このことにより、自信を付け、在校時間も増えている。

課題

別室のスペースを確保し、別室登校生徒を全て受け入れること。

不登校生徒の支援について

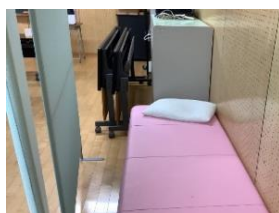
不登生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生である。小学校で若干の不登校傾向にあったが、中学校入学後はしばらくの間、通常どおり登校できていた。しかし、6 月の運動会以降休みがちになり、2 学期から欠席が続くようになった。保護者は、当該生徒の登校に対する意思を尊重しており、現状を見守っている。親子関係は良好な様子である。

具体的な取組

○校内別室利用の充実

視聴覚室を校内別室として整備し、机・いす・パーティション・ベンチ・簡易ベッドを設置して活用している。学習する場の確保とともに、ほっと一息つける場所をつくることで、不登校生徒が安心できる「居場所の提供」を行った。



○校内委員会の設置

特別支援教育コーディネーターを中心に、管理職、各学年特別支援担当教員、特別支援巡回指導教員、包括支援員、養護教諭を委員とする校内委員会を週 1 回開催した。不登校生徒や別室利用の生徒、合理的配慮が必要な生徒の状況確認や支援方法、校内の体制について定期的に話し合った。

○ICTの活用

一人 1 台端末のアプリを活用し、こまめに連絡を取るようにしている。また、教科によっては一人一台端末での課題に当該生徒のペースで取り組めるようにしている。

○学習環境の整備

生徒が持参した学習教材を自主的・主体的に取り組むことを基本としている。また、オンライン授業に参加することで授業の進捗や他の生徒の学習の様子を見られるようにした。

成果

学習活動に前向きになり、校内別室を利用することができるようになった。教室では誰とも話せなかったが、別室では学年を越えた交流ができるようになった。

昼夜逆転の生活が見られたが、別室登校が継続できるようになり、生活リズムが整ってきた。

課題

校内別室指導員などの人員を確保することや、不登校生徒の半数以上が校内別室への登校もできていない状況を改善することが課題である。

多様な学びの場を確保する別室登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生である。入学時から小学校時代の不登校経験により、集団に対する不安や緊張が高く、言語活動への苦手意識からコミュニケーションに対する自信が低い状況であった。しかし、適宜校内別室を活用することで、今では学級への参加が増え、当該生徒も自信を高めている。

具体的な取組

○情報共有と組織的対応

支援員が、週 1 度の特別支援委員会で、校内別室の生徒の状況について報告をすることで情報の共有を行った。また、適宜当該生徒のケース会議を行い、当該生徒が自分の力で学習していくことができるよう教材の相談や取り組む時間の構造化を図った。

○校内体制の強化

校内別室では、対人関係に自信を深める目的で知育カードゲーム等、支援員や生徒同士で交流できる機会を設けた。また、支援員と教員との情報交換会を実施し、当該生徒の取組の様子を振り返り、関わり方の検討や学習課題の提示等につなげた。

○別室登校生徒への支援スペースの活用

別室内の支援スペースは、不安や緊張が高まった際に利用できるようにした。利用時は、自ら学習を用意し、取り組むことになっている。必要な課題に自ら取り組むことができ、支援スペースにいる生徒や支援員と交流を図ることで対人関係についても自信を深め、教室での参加につなげた。

○個別支援の充実

今年度から別室の利用希望者は、1 学期～3 学期の個人目標を立て、それをもとに個別支援を行った。また、タブレット端末のアプリで、認知機能を高めるトレーニングを行った。



成果

当該生徒は、学校に通えなくなる理由を考え、不安が高まることが多かったが、校内別室が心の居場所として機能している。今は利用頻度が減少し、学級活動への参加が増えた。不登校リスクの高さを校内別室の活用で減らし、登校の安定につながった。

課題

個別具体的な指導を充実させるために、取り組む課題と時間をより明確にする必要がある。

「多様な学びの保証」居場所事業について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 6 年生である。小学校 3 年生から教室にいられなくなり、欠席が多くなってきた。登校すること自体にストレスを感じ、教室で授業を受けて他の人と同じペースで生活することに強い拒否感を示していた。小学校 5 年生から特別支援教室を利用している。

具体的な取組

○スタディルームの活用

児童の「多様な学び」を保証するために空き教室を校内別室として活用している。校内の居場所の確保の中心的役割を果たしている。当該児童は、オンライン学習をしたり、担任と約束した課題に取り組んだりしている。学年ごとに取り組める課題も用意している。

○個別学習室の活用

校内別室でも落ち着いて学習することが難しく、一人の空間を好む児童の居場所として、個別に学習できる小部屋を 6 部屋確保し、提供している。オンラインで教室とつなぐことで、当該児童の様子を担当がいつでも確認できるように工夫している。

○保護者サークルの創設

不登校児童の保護者が、有志でサークルをつくっている。月 1 回程度、学校内で会合を開いている。副校長や生活指導主幹が参加することもあり、悩みを聞いたり、助言を行ったりしている。一人 1 台端末のメッセージアプリのオープンチャットを活用し、情報共有も行っている。

○サークルによるイベントの実施

保護者サークルが中心となって学校内外でイベントを行っている。

家庭科室で、カレーやクッキー作りを行った。



成果

校内で不登校対応や居場所づくりの取組を行っていることについて保護者から肯定的な意見をいただいている。当該児童の在籍学級の児童にも、様々な学び方があることへの理解が進んできた。

課題

児童の特性やニーズに応じた支援を行う人手の確保や、一人の空間を好む児童が増えてきたことによる場所の確保が課題である。

I C T を活用した不登校児童への対応の充実について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 5 年生で、小学校入学当初は学級に加わり、様々な活動に積極的に取り組み学校生活を送っていた。しかし、兄弟の不登校や当該児童の特性など、複合的な要因による人間関係の困り感を感じるようになった。次第に教室に入ることが難しくなり、2 年生から不登校となり、4 年生から校内の別室登校をしている。

具体的な取組

○デジタルドリルを活用した学習機会の保障

学年全体の取組として、9 月からデジタルドリルを導入した。当該児童は登校していない日も宿題を欠かさず提出し、自信を深めている。また、担任は提出状況や学習の理解度を把握し、支援に役立てることができた。

○タブレット端末を活用した児童の学級への所属意識の向上

当該児童の所属する学級では、タブレット端末に日直が明日の予定を共有したり、委員会やクラブなどの役割を掲載したりした。これらを学級全体で共有することで、少しずつ学級への所属意識を得られるようになった。

○学校行事の個別対応

運動会、移動教室などの学校行事には参加できなかったが、担任が欠かさず声かけを続けている。学芸会の前には、担任が別室を訪れ、直接台本を渡した。とても嬉しそうに台本を読む姿があり、また、支援員の促しで保護者と共にリハーサルを見学することができた。

○対象児童の情報共有

「支援日誌」を個別に作成した。日誌には、支援員が一日の行動の様子を記入する。個々の児童の状況把握が容易になり、当該児童への声かけや指導に役立った。記録後担任、養護教諭、管理職、特別支援教育コーディネーターが回覧し、情報の共有を行っている。



成果

支援員と学年、養護教諭等が互いに連携をしながら、当該児童への対応を行った。登校が安定しなかった児童が担任の声かけにより継続的な登校ができるようになった。

課題

別室における児童の活動をより自主性を育める校内体制を整えることが課題である。

安心して登校できる個に応じた支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、コミュニケーションの課題から、人間関係をうまく構築できず不安や孤立感が生じ、友人ができなかったり、居場所が見付けられなかったりした。また、家庭での学習習慣が定着しておらず、学習意欲はあっても長時間連続して学習することが難しかった。

具体的な取組

○別室の開放

別室の開放により、自分のペースで学習に取り組める場を設けるなどして、安心して登校できる環境を整えた。



○補充指導の実施

個別の指導で学習効果の期待できる生徒を対象として、週 1 回教科補充の個別指導を行った。当該生徒の理解度に合わせて学習を進め、適した学習方法を一緒に考えることで、学習や進路に対する意欲の向上を図った。

○教室環境のUD化

全教室において、UD化を行っている。どの生徒も集中しやすい教室の環境整備や、板書等が見やすくわかりやすくなるように、UDフォントや指示カードの活用等を実践している。

○SCや巡回心理士との連携

不安を少しでも取り除き安心して登校できるように、定期的にSCとの面談を行った。また、年 10 回の巡回心理士からの指導や助言を支援につなげた。

成果

不登校の状態が続いた当該生徒に対し、担任を中心に別室登校や、SCや通級教室、養護教諭と連携し、対応を行ったところ、別室に登校できるようになった。また、週 1 回の教科補充の個別指導に取り組むことで、進路に対して前向きに考えられるようになった。

課題

一昨年度の学校復帰率は 13%で、昨年度は 20%であった。連携の成果として復帰率が上昇しているが、不登校生徒数自体が増加していることが課題である。引き続き個に応じた対応を検討しながら、支援を行っていく。

教室復帰を目指す生徒の支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生で、小学校 6 年生 2 学期から不登校傾向がみられるようになった。教職員と関わることには抵抗感がなく、放課後に担任と勉強したり定期的に面談したりすることはできていた。同年代との関わりや集団に入ることが苦手だったため、別室の利用を促した。

具体的な取組

○別室の利用①

- ・別室では緩やかな時間割はあるが、無理にその時間割に合わせる必要はなく、当該生徒のその日の状態に合わせて過ごすようにして、無理なく同年代の輪の中に入れるよう配慮した。
- ・学年が上がるごとに利用日数・時間が増えていった。

○S C 面談を定期的にいれる（週 1 回）

- ・S C との面談は定期的に登校を促すことにもつながった。
- ・別室では把握できない当該生徒の気持ちを確認できること、それを別室担当や担任と共有することで今の当該生徒の状態を把握でき、次の支援につなげることができた。

○別室の利用②

- ・別室で過ごすことに慣れてきた頃に集団活動（ゲーム・折り紙・黒板アートなど）に取り組むことを少人数から始めることで、集団で過ごすことに慣れていった。



○教室での受け入れ態勢

- ・担任が別室によく顔を出していたこと、学級生徒が当該生徒の参加を温かく受け止めたことで、担任のお手伝いから始まった教室での活動も、今では学級生徒と一緒に活動できることを楽しいと感じるまでになった。
- ・その結果、卒業後の過ごし方のイメージをもてるようになった。

成果

緩やかな時間や関係で過ごせる場所が学校の中にあるということ、また、そこで当該生徒のペースに合わせステップを踏むことができることは教室復帰を目指す生徒にとって効果的であった。

課題

担任を含め、教員が別室に顔を出すことは教室復帰につながるが、登校に合わせてその時間を捻出する必要がある。